

# 棚田学会通信

第72号 目次 2024年2月26日発行

特集：棚田×写真	1
棚田と写真	2
棚田に惹かれて	
～棚田を彷徨し写真を振りながら思うこと～	3
写真からみた棚田景観研究	4
愛媛県における棚田プロモーションの取り組み	5
日本の棚田遺産紹介：兵庫県多可郡多可町「岩座神の棚田」	6
会員便り：江戸時代初期からつなぐ遺産「岳の棚田」の課題と展望	7
事務局ニュース	8



山梨県南アルプス市中野の棚田（提供：青柳 健二氏）

## 特集：棚田×写真



山形県山形市蔵王山田の棚田（提供：青柳 健二氏）

昨年の10月から棚田学会「棚田のいま」フォトコンテストがスタートしました。切っても切れない深い関係のある「棚田」と「写真」。棚田学会通信72号では、「棚田×(かける)写真」というテーマで特集を企画してみました。棚田への思い、写真への思い、地域や研究、いろいろな視点から記事を寄せて頂きました。日本の棚田遺産紹介のコーナーでも、紹介頂いた棚田でのフォトコンテストの話題に触れて頂き、写真尽くしの特集になっております。本特集が棚田と写真にあらためて思いを寄せる特集となれば幸いです。

(棚田学会編集委員会)

## 棚田と写真

写真家 青柳 健二

今から30年以上前の話である。私は当時アジアを中心にした外国の写真撮っていた。とくに中国南部の少数民族の文化に興味を持ち足しげく通っていた。数えてみれば雲南省には通算26か月は滞在していたことになる。その少数民族たちの生業といえば農業で、各地で棚田を作っていた。今では世界遺産にも登録された雲南省南部のハニ族棚田はとくに有名で、何千何万という田んぼが階段状に広がる風景は圧巻というしかなかった。

ある村の簡易宿泊所に泊まって、朝何気なく外を見て驚いた。棚田には雲海が漂い、対面から朝陽が昇ってきたのだ。カメラを持って棚田を見渡せる場所へ急いだ。こんな風景が現実にあるのかと、その感動は大きなものだった。

この経験があって、アジアの、世界の棚田を撮ってみようという気持ちが芽生え、その後、中国の他、東南アジア、ネパール、イラン、マダガスカル棚田を撮影し、写真集や写真展でその作品を発表した。

実は当時、「アジアの棚田」の中には「日本の棚田」は入っていなかった。アジアのスケールの大きい棚



中国雲南省・元江の棚田



マダガスカル・ギーチュの棚田

田を見ていたせいで、どうせ日本の棚田なんてたいしたことないだろうと高をくくっていた。

ある雑誌の企画で日本の棚田を撮る機会がめぐってきた。「青柳さんはアジアの棚田を撮っているんだから日本も撮ったらどうですか」と勧められた。1999年、「日本の棚田百選」が発表された直後だった。

私は車に寝泊まりしながら、中部地方や関西地方の15カ所以上の棚田を2週間かけて回ったが、この撮影旅で日本の棚田の魅力にはまってしまった。

規模はさすがに中国の棚田には及ばないが、きれいに管理された棚田の風景は美しかった。中には2、3枚の棚田を、老夫婦だけで作っているところにも出会い、その土地に対する愛着が感じられ、一気に日本の棚田撮影にのめりこんでしまった。風景の美しさもそうなのだが、棚田の背後にある物語に魅かれたといってもいい。

翌年には3か月かけて棚田百選すべての棚田を巡った。その後も各地の棚田撮影は続けていて、NPO法人棚田ネットで「旧暦棚田ごよみ」を作り始めて11年経った。棚田の写真というと、初夏の水が張られた田植え直後の棚田や、秋の収穫直前の黄金に色づいた棚田が、写真的な被写体としては人気があるのだが、棚田ごよみを作るようになったので、あまり写真的ではないと思い込んでいた11月とか2月にも撮影することになった。すると、今まで気がつかなかった四季折々の棚田の風景も知ることになったのだ。初夏や秋だけではない、1年を通して様々な表情を見せてくれる棚田を再発見した感じだ。

今は、棚田の風景以外にも、日本古来から続く民間信仰「狼信仰」の写真も撮るようになってきているが、それは「その土地の物語」に魅力を感じるからで、基本、棚田をめぐる撮影旅と変わりが無いということに気がついた。

あらためて日本に興味を持ち、日本を撮影するよ

うになったきっかけも、棚田に出会ったからに他ならず、棚田には感謝の気持ちでいっぱいだ。

**棚田に惹かれて  
～棚田を彷徨し  
写真を撮りながら思うこと～**  
棚田学会員 安井 一臣

**私の棚田遍歴**

50歳代も半ばを過ぎたある日、ふと立ち寄った街の書店で写真集「棚田」\*<sup>1</sup>を見かけ、その美しさに心を奪われた。これが棚田に惹かれる契機となり、元々趣味としていた風景写真撮りの主な撮影対象が棚田となった。以来約30年、各地の棚田で彷徨を楽しみながら現在に至っている。彷徨を重ねるうちに、風景としての美しさだけでなく、その背後にある地域文化や多面的機能など、棚田の社会的価値にも関心が向くようになった。

有難いことに、私が撮った素人写真に関心を示してくださる方々の知己を得て、以下のような出版物に採用されたことは、私の密かな喜びである。

1. 日本の米カレンダー 富山和子編 国際カレンダー (株) 2018年10月のページ  
大浦の棚田 (佐賀県唐津市肥前町大浦)

大小の島々を浮かべる穏やかな伊万里湾の波打ち際に接する絶景の棚田である。海を背景にした棚田の風景はあまりにも有名で、写真愛好家にとっては垂涎の的であるが、この写真は海を背にして棚田とそれを守り続ける集落を撮ったもので、アングルとしては珍しい (写真1)。

2. 中山間地域フォーラム会報 No.6 (2020) 表紙 白米千枚田 (石川県輪島市白米町)  
能登半島の北端にあって、国の名勝に指定され、世界農業遺産「能登の里山里海」の中核をなす美しい棚田である (写真2)。

今年 (2024年) の元日、この地域一帯は能登半島地震に見舞われ、多くの人命が失われた。本稿執筆時点 (2024年1月) では、この棚田の被害の全容は明らかでないが、断片的な情報によれば大きな斜面崩壊はないものの、畔には無数の亀裂が見られるという。被害が少しでも軽いこと、一刻も早く米作りが再開できることを祈るばかりである。



写真1 大浦の棚田 (佐賀県唐津市)

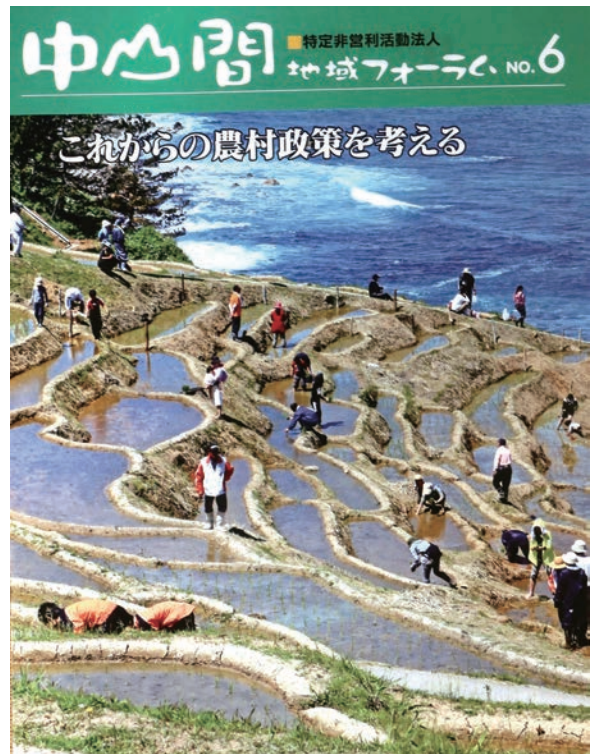


写真2 白米千枚田 (石川県輪島市)

3. 棚田学会誌 No.19 (2018) 表紙 大山千枚田 (千葉県鴨川市平塚)  
東京都心から最も近い棚田と言われている。

NPO 法人大山千枚田保存会の主導による活気溢れる棚田オーナー制度、子供たちの棚田体験、田んぼ・里山の生きもの調査など多彩な活動によって3ヘクタールにも及ぶ棚田が見事に保全され、見る人の心を和ませる（写真3）。都会に近いこともあり、都市住民と棚田をつなぐ窓口ともなっている。



写真3 大山千枚田 (千葉県鴨川市)

#### 棚田フォトコンテスト「棚田のいま」によせて

棚田学会は2023年から「棚田のいま」と題して、フォトコンテストを実施し、棚田の写真を広く募集中である。「棚田の“いま”」の意味するところは、美しい棚田の風景はもとより、その背後にある様々な課題も写し込まれている作品も応募の対象だと解釈している。募集要項を見たとき頭に浮かんだのは、長野県小谷村の棚田の風景である（写真4）。ここには米作りを続ける田んぼと転作のソバ（白い花）、休耕田（右上）、耕作放棄田（左上）が混在していた。これは「棚田のいま」の縮図ではないかと思う。



写真4 棚田のいま (長野県小谷村)

#### 今後に向かって

私たちは気候変動による激甚気象災害、世界各地での戦乱、突発的地震災害など多くのリスクの中

で暮らしている。このようなリスクを少しでも軽減し、平和で持続可能な資源循環型社会を次世代につなぐことは、今を生きる私たち世代の責務である。

「食べ物と水が国力2030年」という川柳を何かで見かけた。言い得て妙である。食料危機の懸念が増す中、将来の食べ物と水の確保に棚田が果たす役割は決して小さくない。

写真には撮る人の心が写るといふ。棚田の社会的価値を訴える会心の一枚を撮りたい思いつつ、これからは棚田での彷徨を続けたい。

＊1：棚田（ふるさとの千枚田）ふるきやらネットワーク編 講談社1995

### 写真からみた棚田景観研究

農研機構 農村工学研究部門 栗田 英治

棚田、特に棚田景観を対象とした研究において、写真を用いた手法（航空写真なども含めて）は最も馴染みがあり、数多くの研究成果を生み出してきました。なかでも、見た目（景観の視覚的な側面）に着目した多くの研究では、撮影された棚田景観の写真が人による認知・評価の対象として用いられてきました。人による棚田景観の認知・評価を扱った研究では、評価対象として写真以外にも、動画（映像）、VR（仮想現実）やAR（拡張現実）などを用いた手法、写真や映像に音や匂いなどの視覚以外の刺激を加えて対象とした手法、さらには、被験者に現地に足を運んでもらって実際の棚田を評価してもらう手法など、より現実に近い評価を求めるという方向で様々な手法が存在します。

これらの手法と比較した際の写真を用いた手法の特徴は、「ある時点のある画角（範囲）で切り

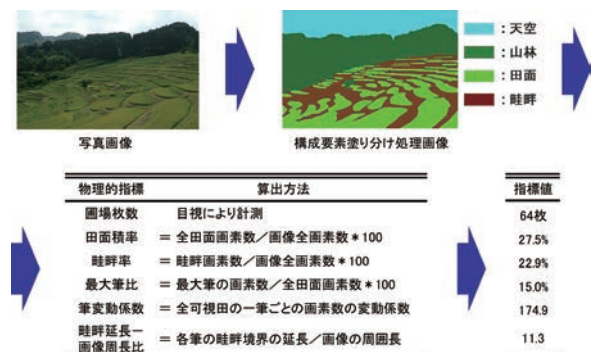


図1 写真を用いた棚田景観の数値・指標化

取る」という点にあると考えます。これは、写真を人による棚田景観の認知・評価に用いる上での強みでもあり、弱みでもあります。強みは、切り取ることによって、棚田景観自体を数値で表すことや、分類をおこなうことなどが容易になり、人の認知や評価との関係が示しやすくなる点にあります。筆者の過去の研究の例では、写真に写っているものを要素ごとに分けることによって、複数の指標として整理することを試みています(図1)。当該研究では、数値化された指標と人の評価との関係性から人の棚田景観の評価が「統一感」という評価と「複雑さ」という評価を併せて持っていることが明らかになりました<sup>1)</sup>。

一方で、弱みは、切り取ってしまうことによって、現実の棚田の一面しか評価できないという点にあります。棚田は、イネという作物を育てる空間であり、畦畔などには様々な植生が存在しており、作物や植物の成長、稲作を通じた日々の営みなどを含めて、とても季節変化が大きい対象であります。また、傾斜地に立地し陰影などが際立つため、時間変化も大きく、一日のなかでも違った表情がみられる対象でもあります。加えて、傾斜地に立地するという特徴は、棚田を見る視点(見る場所)や画角によって、見え方が大きく異なることに繋がります。例えば、写真1は、長野県千曲市の姨捨の棚田を棚田の斜面に向き合う方向からドローン(小型 UAV)を用いて撮影したものです。写真下部では田面区画の曲線の要素が際立つ一方で、写真上部では、田面や畦畔の直線の要素が目立つようになるなど、視点や画角の違いは棚田の見え方、写真に大きく影響します。ただ、これらの点は、撮影対象としての棚田そのものの魅力でもあり、多くの人が棚田に魅せられレンズを向ける理由の一つなのではないかと思えます。研究の視点でいえば、変化の大きな対象の1面を切り取って捉えているという点を、しっかりと踏まえて取り組んでいくことが必要と考えます。



写真1 ドローンを用いて撮影した姨捨の棚田

- 1) 栗田ら(2004): 棚田景観の評価構造と関係する物理的指標、農村計画論文集、第6集、85-90

**愛媛県における  
棚田プロモーションの取り組み**  
愛媛県農林水産部農業振興局農地整備課  
高須賀 愛美

愛媛県では、令和5年度に初めての試みとして、『「愛媛のたなだん」フォトコンテスト』を開催しました。今回は、ホームページの開設とフォトコンテスト開催に至るまでの経緯と今後の展望についてご紹介します。

**1. ホームページ「愛媛のたなだん」開設までの経緯**

愛媛県は、耕地面積の約6割が営農環境の厳しい中山間地域にあり、棚田・段畑も多く存在しています。耕作放棄地の拡大が懸念されるなか、県ではハード整備だけでなく、都市地域に住む子供を対象とした棚田ふれあい教室を開催するなど、都市住民との交流等による棚田保全・利活用の積極的な促進を図ってきましたが、新型コロナウイルスの流行に伴い、各種イベントの中止を余儀なくされる状況となりました。

こうした中、農林水産省のつなぐ棚田遺産に県内5地域が認定されたことをきっかけに、改めて県内外へ向け広く愛媛県の棚田・段畑の魅力や価値を発信しようと、令和4年に愛媛県の棚田・段畑を紹介するホームページ「愛媛のたなだん」(URL: <https://ehime-tanadan.jp/>) を開設しました。「愛媛



写真1 ホームページ「愛媛のたなだん」

のたなだん」では、棚田・段畑の23地域を抽出し、地域の紹介やオーナー制度等の情報、プロモーション動画を公開するなど、豊富なコンテンツを掲載し棚田・段畑の魅力を発信しています。

## 2. フォトコンテストの開催について

棚田・段畑を将来へ引き継いでいくためには、減少の一途を辿る農業従事者の確保が大きな課題ですが、そのためにまずはサポーターなど関係人口の増加を図るとともに、棚田・段畑地域の方々に誇りを持っていただくことが重要と考えました。そこで、都市住民等に関心を持ってもらい、訪れるきっかけをつくるため、また棚田・段畑地域の方々に地域の魅力を再確認してもらいたいとの思いで、美しい田園風景を募集する『「愛媛のたなだん」フォトコンテスト』を開催することとしました。県内13地域の棚田・段畑地域の方々の協力のもと、各地域の魅力を映した写真を募った結果、計207作品の応募を頂きました。応募作品のなかから最優秀賞、優秀賞、各棚田・段畑賞を選出、そのうち各棚田・段畑賞については地域の方々が自ら選考しており、賞品は棚田米など各地域の自慢の農産品を提供していただきました。入賞作品は「愛媛のたなだん」内で公表しておりますので、是非ご覧ください。



写真2 最優秀賞「オーナー田への苗配り」

## 3. 今後の展望

愛媛県では今後も県内棚田・段畑地域の情報発信を積極的に行っていくほか、来年度も引き続きフォトコンテストの開催を予定しています。この機会に是非愛媛県内の棚田・段畑に足をお運び頂き、自慢の一枚をフォトコンテストへ応募頂ければ幸いです。

# 日本の棚田遺産紹介

## 兵庫県多可郡多可町「岩座神の棚田」

多可町役場企画秘書課 吉田 美千留

### 岩座神

なんと読むの？と大概の人に聞かれる。

いさりがみです。と答えると、とても神秘的な名前ですね。なんて言われる。

兵庫県のちょうど真ん中あたり、人口19000人の小さな田舎町「多可町」。総面積の8割が森林という山に囲まれた町。

その山奥に存在するのが「岩座神」集落だ。北播磨最高峰の「千ヶ峰」の麓に位置する、わずか20戸ほどの小さな集落。

そこには、「日本の棚田百選」に選ばれた棚田が息づいている。

江戸時代の初めに寺勾配工法で積み上げられたと言われる高い石垣の棚田が大小あわせて400枚以上並び、古い石垣は鎌倉時代ともいわれている。

周辺には茅葺き屋根の民家も残るなど、日本の原風景がそこには広がっている。

岩座神の棚田は、千ヶ峰の南麓、杉原川の支流・多田川の最上流域に位置しており、千ヶ峰は別名「仙ヶ峰」ともいわれ、「神の存在する山」との山岳信仰があり、岩座神山（いわすわりかみやま）と呼ばれてきた。そこにある塔の石という巨岩が、岩座神の呼び名の由来だと推測されている。

岩座神の棚田は、集落の人たちが先人から受け継いだ貴重な遺産として大切に守りぬいてきた。

そんな中、令和4年2月に、国が「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」として全国271棚田を選定。兵庫県下7つの棚田のうちのひとつとして岩座神の棚田が選ばれた。

町は、この選定を記念し、多可町公式Instagramを活用して、「岩座神の棚田フォトコンテスト」を開催。令和4年5月1日から9月30日の間、棚田の写真をSNS上で募集した。できるだけ四季折々の棚田の写真を募るために、令和3年4月1日以降に撮影した写真を応募対象に含めた。SNSを利用することで、カメラ初心者の人でも気軽に応募できるようになり、若い世代にも岩座神に足を運んでもらう良い機会となった。応募総数250点。岩座神集落の住民に参加を呼びかけ、審査を行った。

ドローンを活用した写真も多くあり、夜の棚田や雷光など、普段目にする棚田のイメージとは違う姿もあり、集落の人たちにとっても新しい発見があった。入賞の賞品には、棚田の新米など町の特産品を詰め合わせた。審査日が10月中旬だったため、採れたての新米を集落から提供いただいた。応募者からはまた開催して欲しい、との声も多く、今後もSNSを活用して町の魅力を配信していきたい。



岩座神の公会堂での審査の様子



@9056mori さん

偶然か、必然か。

棚田と雷という異色の組み合わせが印象的な作品

## 会員便り

「江戸時代初期からつなぐ遺産・

岳の棚田の課題と展望」

岳乃百姓一揆代表 佐藤 勇太

岳（たけ）の棚田は美しい景観と豊かな歴史があるが現在、高齢化・過疎化による耕作放棄地の増加や自然災害による石垣の崩壊といった様々な問題に直面している。これらの問題は、棚田の持続可能な農業を脅かし、地域の経済と文化にも深刻な影響を及ぼしている。本論文では、これらの課題に焦点を当て、米づくりが抱える赤字やイベントの重要性について探求し、岳の棚田の未来への展望を考察する。

まず、高齢化と過疎化が岳の棚田の主な課題である。農業は肉体労働を伴うため、若い世代の地元離れが進む中、高齢の兼業農家が多くなっている。これにより、新たな技術や手法の導入が滞り、持続可能な農業が難しくなっている。過疎化もまた、地域全体の活力を低下させ、地元のコミュニティが弱体化している。

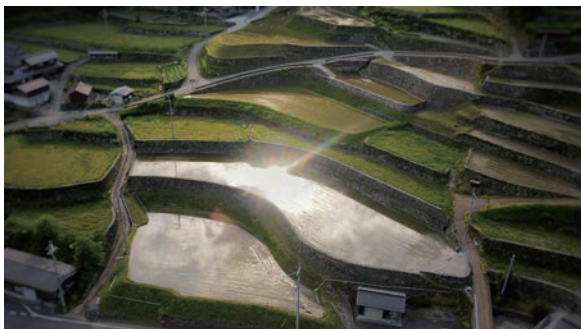
次に、耕作放棄地と石垣の崩壊が景観と環境への悪影響をもたらしている。農地の放置により、豊かな生態系が減少し、生態的均衡が崩れている。また、石垣の崩壊は棚田の構造に深刻な損傷を与え、これを修復するための資金が必要とされている。

さらに、米づくりにおいては経済的な赤字が懸念される。農産物の価格変動や気象条件の不安定性が、収益を左右し、農家の経済的な安定性を脅かしている。これにより、若い世代が農業を選ぶモチベーショ



@gfmk56 さん

夜の棚田に、満点の星空が輝く幻想的な一枚



@midotan1173 さん

ドローンによる撮影 陽の光を反射して輝く棚田

ンが低下し、棚田の未来が危ぶまれている状況にある。

しかし、これらの課題にも克服の余地がある。地域社会全体での協力と持続可能な GAP の導入が重要である。また、地域振興イベントや観光の促進により、地元経済を活性化させることができる。これにより、若い世代への魅力向上が期待でき、地域の再生が可能となる。総括として、岳の棚田が直面する課題は複雑であるが、地域全体での協力と持続可能な農業への取り組みが今後の伴となる。

経済的な持続性と環境的な健全性を両立させるために、地域住民、行政機関、そして関連産業が一体となって取り組むことが求められる。

岳の棚田がその美しい風景を次世代に残すためには、今日の努力が重要である。



写真1 江戸時代初期の先代たちが  
多くの斜面に切り開いた棚田



写真2 稲刈りイベント

## 事務局ニュース

### ■第1回棚田学会「棚田のいま」フォトコンテストのお知らせ

棚田は人々が自然に働きかけてできた水田であり、人々の生活を支え、美しい景観や豊かな文化、人々をつなぐ場を提供する社会装置です。

しかし、棚田を取り巻く日本の農業は、農業従事者の減少と高齢化が進み、後継者不足や耕作放棄地の増大を生じています。

このような危機に直面している日本の農業・農村を守るためには、その基盤となる棚田を維持・保全することが国民共通の課題となっています。

棚田学会は、長年にわたり棚田に関する研究・啓蒙を行ってきましたが、新たに「棚田のいま」をテーマに棚田の現状を写真によって捉え、広く国民に発信して棚田の維持・保全に寄与したいと考え、第1回棚田学会「棚田のいま」フォトコンテストを開催しました。

写真の募集期間は2023年10月1日から2024年2月29日までで、入賞作品は2024年度棚田学会総会（2024年8月24日）で発表するとともに、棚田学会ホームページに掲載します。なお、次年度以降も開催します。

### 【編集後記】

今回の棚田学会通信の企画編集に当たって、インターネット等で棚田にまつわるフォトコンテストを探したのですが、近々に開催されたものだけでも結構な数が開催されていることを知りました。Instagramなどの写真系のSNSの普及で気楽に参加出来るようになったこともあるかと思いますが、やはり、つなぐ棚田遺産の認定を契機に、再度、棚田への関心が高まっており、その入り口に写真がなりうることをあらためて実感しました。最後に、年末年始のお忙しい時期にも関わらず快く記事の執筆を引き受け下さった執筆者の皆様に、この場をお借りして、お礼申し上げます。（栗田英治）

棚田学会通信 第72号 2024年2月26日発行  
発行 / 棚田学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1  
早稲田大学教育・総合科学学術院 高木徳郎研究室内  
TEL: 03-5286-1572 FAX: 042-385-1180  
E-mail: tanadagakkai@gmail.com